

P07

子ども発達センター受診者の口腔に関する意識調査

○星野倫範、品川光春、釜崎陽子、日高 聖、藤原 卓

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科小児歯科
しながわ小児歯科医院

【目的】佐世保市子ども発達センターは、長崎県北部における子どもの発達・療育支援の中核をなす二次医療機関で、歯科健診・相談を通じて、発達に問題を抱える子どもの歯科治療に対する支援も行っている。今回、佐世保市歯科医師会と長崎大学小児歯科による子ども発達センター関連歯科事業として、地域歯科保健・歯科医院へのフィードバックをするためにセンター受診者に対し、アンケートを行い、その動向を調査したので報告する。

【方法】平成23～25年度に、新規に子ども発達センターを受診した患児を対象として、アンケートを行い、男女比、口腔に関する意識、かかりつけ医の有無、摂食・嚥下指導の希望、市が主催し、歯科健診・相談を行う「歯みんぐルーム」に対する興味の有無等を調査した。

【結果】平成23、24、25年度でそれぞれアンケートの回答があったのは、109、88、92名であった。調査した3年間の平均で、男女比は男子64%、女子36%、口の中で気になることのあるものの割合46%、かかりつけ医のあるものの割合52%、食べ方・飲み方で気になることのあるものの割合36.6%、歯みんぐルームに興味のあるものの割合26%であった。

【考察】受診者に関しては、自閉症など性差のある疾患により、男女比の偏りが生じたと考えられる。口腔に関する意識は約半数が何か問題意識を持っており、それと同様の割合のものがかかりつけ医をもってこれに対処していると考えられる一方、約半数はかかりつけ医もなく、問題意識もないことから、実際に問題がなければ良いが、問題に気づいていないあるいはどうすれば良いか分からないという場合を想定し、地域保健医療的には問題意識を持ってもらうよう啓発活動を行っていく必要があると考えられた。

P08

定期健診に関する意識調査

○濱田菜穂子、中原裕子、杉本いとみ、杉岡千津、大野慧太郎、大野陽真、大野秀夫
(医)おおの小児矯正歯科(山口)

【目的】当院は1988年山口県で初めての子ども専門の歯科医院として設立され、子どもの包括歯科医療を実践してきた。設立から26年が経過し、地域住民は健康志向の高まりから質の高い医療を求めるようになった。そこで、今回は当院に定期的に受診している患者において定期健診に関する意識調査を行ったのでその実態について報告する。

【調査方法】調査対象は当院の定期健診に定期的に2年以上受診した患者とした。調査人数は122名(男性39名、女性83名)であった。調査は18歳未満の患者は保護者に、18歳以上の患者は本人にアンケート調査を行った。調査期間は2013年2月1日から2月28日までの1ヵ月間であった。患者の来院年数別に、2年以上5年未満(2～5年と略)、5年以上10年未満(5～10と略)および10年以上(10年以上と略)のグループに分類し評価した。

【まとめ】定期健診に関する意識調査の結果から以下の結論を得た。1.「なぜ定期的に来院されていますか?」については、2～5年は「歯周病予防」50.0%と高頻度を示したものの、5～10年および10年以上においては「虫歯が来てないか気になる」「歯ならびが気になる」「虫歯予防」および「歯周病予防」が同程度で高頻度を示した。2.「定期的に来院されていますが満足されていますか?」「満足」「やや満足」を合わせて2～5年78.6%、5～10年87.1%および10年以上85.3%であった。3.「2の質問で満足、やや満足とお答えになった方へお尋ねします。健康観について変化した事がありますか?」「口の中の関心が高くなった」は2～5年72.7%、5～10年81.5%および10年以上73.1%とどのグループも高頻度を示した。「歯科に対しての恐怖心がなくなった」は2～5年4.5%、5～10年14.8%および10年以上26.9%と長期来院する患者程、歯科に対しての恐怖心がなくなるものと思われた。